

# 対人援助学会第5回年次大会プログラム

1日目（11月9日）

12：00～ 受付開始

（敬称略）

13:00～15：20 ポスター発表	主発表者
1.心的回転課題トレーニング効果の検討ー1名のダウン症児を対象としてー	中川あづさ
2.男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために（その2）コミュニケーションへと輻輳する女性性の暴力	國友万裕
3.教師による心理教育的グループ活動の設計体験の評価	有沢孝治
4.サポーターの社会的スキルと失敗傾向に関する介入研究ー学習活動を支えることによる検討ー	孫琴
5.両親間葛藤を認知した子どもへの支援の考察ーきょうだいの有無や親密性と抑うつに着目してー	木下大輔
6.自閉症スペクトラム児の療育プログラム開発における発達の視点と工夫（1）幼児期～小学校中学年期：進行固定プログラムの柔軟化	春日彩花
7.自閉症スペクトラム児の療育プログラム開発における発達の視点と工夫（2）小学校高学年期：「負けられない」子どもが勝敗の決まる遊びを楽しむために	河邊 光
8.自閉症スペクトラム児の療育プログラム開発における発達の視点と工夫（3）中学・高校生期：参加児自身によるルールづくり	山路美波
9.プロファイリングからポートフォリオへ学生ジョブコーチの実践から支援をつないでいくための「情報」について考える	中鹿直樹
10.Café Rits; ポートフォリオを構築するための模擬喫茶店舗ー特別支援学校と大学との情報移行を通じてのポートフォリオの作成ー	尾西洋平
11.模擬喫茶店舗の実習を通して発見された障害がある高等部生徒における伝票計算のためのカイゼン	井上 葉
12.脳性麻痺者の自傷行動を減少させた要因についての検討	掛橋知咲
13.攻撃者と被攻撃者を援助するための攻撃行動随伴性	佐久間崇
14.自閉性スペクトラム児の「できる」をキーワードとした他立的自律の促進ー横断歩道の横断スキルについてー	山口真名美
15.めぐりあいー流動的な出会いの場における相互行為ー	清武愛流
16.介護福祉士養成校の学生に対する介護実践記録の指導	渡辺修宏
17.福祉施設で働くケアワーカーのストレス要因ー職業性ストレス簡易調査票を用いたアンケート調査よりー	高野知博
18.小さな親切行動について考えるー大学生のアンケート調査よりー	三橋真人
19.家事遂行の変化へ向けた選択肢の理解ー日常生活においても参照可能な知見の構築へー	滑田明暢
20.ダウン症児に対するズボン着衣の指導ー刺激フェイディング手続きを用いてー	小幡知史
21.法／医療現場における質的研究のあり方とTEMの位置づけ	サトウタツヤ

## 企画ワークショップ1

発達相談と対人援助ー発達支援と子育て支援ー

企画者：荒木穂積（立命館大学産業社会学部/応用人間科学研究科）

話題提供者：福田央子（耳原総合病院小児科・発達相談員）

話題提供者：立田幸代子（岸和田市保健福祉部健康推進課、発達相談員）

話題提供者：山本翔太（社会福祉法人桃郷 児童発達支援センターつくしんぼ園・発達相談員）

指定討論：竹内謙彰（立命館大学産業社会学部/応用人間科学研究科）

子どもの子育て支援と関わる専門職の一つに発達相談員がある。発達相談員は、子どもたち一人ひとりの発達やニーズに応じた発達支援や子育て支援をおこなう。発達支援の業務と関わっては、一人ひとりの発達段階や家庭環境を把握する力量とそれぞれの個人・家庭の個別事情に応じた具体的な介入・対応の実践力が求められる。また、障害や問題の早期発見・早期介入および予後（経過と評価）と関わっては、支援体制や支援チームを組織する専門性が求められる。加えて、医療・福祉・教育など子育て支援に不可欠な地域の諸機関間の連携と調整をはかる地域ネットワーク・コーディネーターとしての役割も期待される。

本ワークショップでは、現在、市町村、施設、病院で発達相談員として働いている現職の人たちから、対人援助職としての発達相談員の現状と課題を報告してもらい、対人援助に求められる発達相談の専門性として何が期待されているかについて考えていきたい。

## 企画ワークショップ2

「佐藤は見た!!!!!!ー個人から個人へ向けられる目線と支援の展開ー」

企画・司会：石幡 愛（NPO法人クリエイティブサポートレッツ、東京大学大学院教育学研究科）

話題提供者：山下健太（NPO法人クリエイティブサポートレッツ）

水越雅人（NPO法人クリエイティブサポートレッツ）

障害福祉施設アルス・ノヴァでは、施設利用者や支援者ひとりひとりの長所を可視化し共有する記録用紙「ヒトマト」を開発し（石幡・田中, 2013）、各支援者の物の見方を活かしながら、各利用者の長所に即した支援を模索してきた。その背景には、一般的に問題とされる行動をその人の表現として読み替える価値観と、支援や振り返りの行き詰まりの打開を目指す試行錯誤があった（石幡・山下・佐藤・田中, 2013）。本企画の前半では、そうした価値観と試行錯誤の下、実現した支援の事例を紹介する。これらの事例は、問題視されたり見過ごされたりしがちな利用者の行為を見逃さず、新たな意味や価値を見出した各支援者独自の目線が、その後の支援の可能性にとって重要な役割を果たすことを示唆している。後半では、どの現場にでもあろう「面白いこと」「すごいこと」を参加者から引き出し、支援者がそれぞれの価値観で「面白い」目線を持つことから展開する支援の可能性について議論する。

## 企画ワークショップ3

ケアする人のケア ～対人援助職のエンパワメントを考える～

発表者：梁陽日（立命館大学大学院 先端総合学術研究科/生存学研究センター マイノリティ研究プロジェクト）

医療、福祉、心理、教育、労働と幅広いフィールドを持つ対人援助職は、感情労働とも称され、現場での激務が続く中、バーンアウトとは常に隣り合わせとなり、近年はその対応策が強く求められている。

本企画ワークショップでは「ケアする人のケア」を主題に、上記課題に応えるための対人援助職のエンパワメントを目的にしたグループセラピーのプログラムを提供する。ワークショップでは対等な関係性の中で、相互の日々の働きをねぎらい、自らの働きを再評価しながらエンパワメントを体感する。

同時にプラスのグループダイナミクスを経験しながら、そのメカニズムを理解して実際の臨床支援現場で活用することや、「ケアする人のケア」が可能な組織文化創りのヒントの機会となることをめざす。

※本プログラムは、企画者がSVなどを務める大阪市職業リハビリテーションセンター等の公的支援機関及び、国立病院機構中四国ブロック看護部でのプログラムを実施します。

企画ワークショップ4	「広報・ホームページ推進委員会企画パネルディスカッション 『対人援助学会におけるWEBコミュニケーションについて考える』」
<p>企画者 乾 明紀（対人援助学会広報・ホームページ推進委員会委員長・京都光華女子大学）          コーディネーター：乾 明紀          報告者①：渡辺修宏（水戸総合福祉専門学校）「学会ホームページへの期待」          報告者②：揚 佳樹（株式会社アグニット）「対人援助×デザイン - デザイナーの立場から - 」          報告者③：東山純也（株式会社美文化計画）「WEBコミュニケーションの最先端」          指定討論①：尾西洋平（立命館大学）          指定討論②：小幡知史（NPO 法人だいち）</p> <p>対人援助学会は、「対人援助学」（ Science for Human Services ）という新しい学範の創造と見直しという学術的な目的だけでなく、「対人援助職についている方々の『連携』や情報交換のプラットフォームを提供」も目的として設立された。 複雑化する社会問題に対応するためには、様々な対人援助職者の連携や融合が必要不可欠になっており、そのための基盤づくりは、この学会の重要なミッションと言える。</p> <p>このような目的を達成するために、年次大会や研究会の開催、対人援助マガジンや学会誌の発刊などをおこなってきたが、本学会が先駆的に行ってきたことは、WEB発刊であろう。WEBにおける情報発信は、「検索」によって多くの人の目に触れることができること、リンクによって様々な関連付けができること、ビジュアル表現の幅が広がること、発刊コストが安価であるなどの利点がある。また、近年はSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）が急速に普及し、国内ネットユーザーの52%の4,965万人が利用（株式会社ICT総研, 2013）しているが、このSNSの利点を含めると、紐帯の強化やつながりの可視化、相互コミュニケーションの速さなどが、WEBの利点としてあげられる。</p> <p>この企画ワークショップでは、大会5周年を契機として、対人援助学会のWEBコミュニケーションを見つめ直し、今後のあり方について検討していく。</p>	

17 : 20 ~ 18 : 30 懇親会

2日目（11月10日）

10：00～11：30 企画シンポジ

対人援助の教育実践

ー学び手の語り(ナラティブ)と行為(アクション)をむすぶ、協働(コラボレーション)を促すー

企画：安田裕子・サトウタツヤ（立命館大学）

企画趣旨・司会：安田裕子（立命館大学）

話題提供：松嶋秀明（滋賀県立大学）・西垣悦代（関西医科大学）

指定討論：森岡正芳（神戸大学）・サトウタツヤ（立命館大学）

対人援助の実践知はいかに構成・産出しうるのか。

ヴィゴツキーは、あらゆる高次の精神機能は、最初に精神間的機能としてあらわれ、次に精神的機能としてあらわれると述べた。最初は他者との間での社会的活動の中であらわれた機能が、のちに個人的活動の中で機能するようになるのであり、すなわち、協働が学びには不可欠であるといえよう。

多様な当事者性を有する他者に、時間と場所の網目のなかで向き合う援助者は、そうしたトパスへの配慮と関与はもとより、援助の目的や援助者としてのアイデンティティを重ね合わせ、その営みを他者と共有し、援助の質を編み上げていく。こう考えるなら、対人援助の教育実践を考えるうえで、当事者に関わる援助者自身がナラティブと援助行為とをいかにきりむすび、援助者同士が当事者を中心にいかに協働しうるのか、といった観点が重要になってこよう。

本シンポジウムでは、臨床心理学を専門に、学校でのコンサルテーションを中心に援助を行い質的研究に還元している松嶋氏、ならびに、医学部の「コミュニケーション実習」などでさまざまなゲーミングを用いた演習を実施している西垣氏より、協働的な教育実践についてお話いただく。

対人援助の教育実践について、そのクオリティを考える場とする。

11：30～12：10 理事会

12：10～12：50 会務総会

13：00～14：00 基調講演

被災者の心を支える、思い出工学の考え方と実践

仲谷善雄 氏 立命館大学 情報理工学部 教授

人は、写真などの思い出の品がなければ過去を思い出せない。思い出は、後ろ向きのものではなく、自己の基盤を形成し、アイデンティティの核となるものである。しかし、大規模災害などで思い出の品を失くす人は少なくない。そのような人は、思い出を想起できなくなる不安を抱え、自分を見失ってしまい、前を向いて生きて行けなくなる。しかし思い出の品が思い出の本体ではなく、想起のきっかけ（トリガー）であるならば、計算機によりトリガーの代わりはできるはずである。このアイデアを基に、個人および共同の想起支援、思い出を用いたコミュニティ形成支援、知識継承支援などの研究を行ってきているので、紹介する。

14:10~15:40 理事会企画ワークショップ・企画ワークショップ

理事会企画ワークショップ 対人援助学マガジンを考える ～書き手として、読み手として～

千葉晃央（京都国際社会福祉センター 京都市横大路学園）  
木村晃子（あったかプランとうべつ）  
坂口伊都（スクールソーシャルワーカー）

2013年9月に14号が発刊された「対人援助学マガジン」。この「対人援助学マガジン」から様々なことが展開してきた。読む側としては、生まれる前の産前から、死んだ後の死後まで様々なライフステージにかかわる援助を知ることができる。書く側としても、連載が出版につながるなど様々なことが起こっている。ニュースレターでもなく、学会誌でもない、マガジンというスタイル。機能、役割、影響など参加者とともに考えていくワークショップです。

企画ワークショップ5 継続的キャリア支援としての情報的連携：「情報バンク」「シミュレーションショップ」の構造とその対人援助学的機能

企画・司会：望月 昭（立命館大学）

発表者

- 1.望月 昭 企画趣旨：当事者の「キャリア」としての自分情報
- 2.上田征樹（京都市西総合支援学校）「情報バンク」の製作と展開
- 3.中鹿直樹（立命館大学客員研究員）Café Rits: ポートフォリオ拡充の「加速器」としてのシミュレーションショップの運営

指定討論：朝野 浩（立命館大学）・土田菜穂（北総合支援学校）

近年、障害のある個人への継続的キャリア支援を目的に、個別個人の「情報」を共有、蓄積、移行するシステムの開発が、学校、市町村など様々な組織で取り組まれている。

このワークショップでは、支援学校の生徒を当事者として、「情報」とは、当事者を社会との関係において、より積極的に位置づけ改善を要請するキャリア支援の一部であるという事を前提にその共有、蓄積、移行といった具体的仕組みの在り方について検討する。

情報蓄積のプロトタイプ「できますシート」発祥の地である京都市西総合学校の上田征樹氏には、個別生徒における行動成立の推移を蓄積する「情報バンク」についてその構造や可能性について、中鹿直樹氏には、個別個人の「できます」コンテンツを拡充する地域資源としての「シミュレーションショップ」（Café Rits）の運用について、実習事例を中心に紹介してもらおう。そして指定討論として、京都の「個別の包括支援プラン」を立ち上げた朝野浩氏と、支援学校にあって学内学外のコーディネーターとして活動している土田菜穂氏からコメントをもらう。

企画ワークショップ6 ひきこもりの家族支援 -TEMによってシステムに接近する試み-

企画：安田裕子・サトウタツヤ（立命館大学）

企画趣旨・司会：安田裕子

はじめに：サトウタツヤ

話題提供：廣瀬太介（滋賀県スクールカウンセラー）

廣瀬真理子（関西学院大学）

指定討論：松嶋秀明（滋賀県立大学）

ひきこもり者は、社会システムから退き、家族システムにおいても、コミュニケーションを回避していくことが多い。一方で、日常的に関与している家族は、そうしたひきこもり者の社会への再接続を促す可能性を有している。とりわけ、ひきこもりや不登校支援においては母親がキーパーソンになることが多いが、家族システムの一員であり社会システムの一員でもある母親は、ひきこもり者が社会に向き合っていくプロセスで、どのような役割を果たすのか。援助者との関わりの中かで、母親、そして家族は、いかに変容していくのか。本シンポジウムでは、システムを時間経過とともに捉える質的研究法TEMの分析枠組みを用いながら、不登校児の母親のカウンセリングをしている廣瀬太介氏、ならびに、ひきこもりに関する家族支援の専門相談を行っている廣瀬真理子氏に、その援助実践における母親ならびに家族の変容の有様をご報告いただく。また、そうした様相を捉えるTEMの援助実践上の意義についても考えたい。

15:50~17:30 口頭発表

主発表者

「傷ついた男性性からの回復と男性性ジェンダー臨床論の構築」②

國友万裕

先生、叱らないで！—生活習慣の改善を促すための援助の必要条件とは何か？—

大屋藍子

中国における障害児の現状とニーズ

呂曉彤

無意識について

山縣弘子

『「講義型授業」から、「双方向型授業」へ』『ボディーワーク』の講師実践から

牛若孝治